

第4回自転車安全利用促進計画検討委員会議事録

実施日時：平成28年1月20日（水）

場 所：京都府公館

時 間：午後1時30分から午後3時30分

- A 5年後の自転車の交通事故件数の数値目標「1,500件」の根拠を教えてください。
- 府警 昨年の自転車の交通事故は2,182件。目標よりも良かった。交通事故そのものは一定の減少傾向にある。しかし、自転車事故だけの割合を抽出すると、増加傾向になっている。
自転車を第一交通手段とされる人は増加してきている。そのことから今後自転車事故は増加していく可能性があると思われる。全ての総合的な数字を計算し、1,500件という数字を出している。
- A 過去にやった対策の結果、どんな対策をしてどれだけ減少したなどの傾向も入れていただければいいのではないかと。
- B 例えば、初年度に取った対策でこれだけ減った、2年目の対策でこれだけ減ったなどの相関関係が分かるものがあればいいのではないかと。
- 府警 みなさんの近くでのこんな事故が発生しているというビジュアル的な情報提供をしていきたいと考えている。
- A 自転車事故の総数1,500件に対しての細かな事故検証も必要ではないかと。
- C 保険の加入促進について、加入率は今まではTSマークだけだったのが、その他の損害賠償保険も入るようだが、どのようにして統計をとるのか。
また、ヘルメットの着用率もどのようにして測定するのか。
- 事務局 今まで、TSマークに何人の方が入っているかであったが、今後は京都府がアンケートを行い、全体のどのくらいの方が入っているかを継続した形で統計を取って行きたい。
ヘルメットについては各市町村等で幼稚園や保育園等へ職員を派遣するなどして調査していく。
- A 前回のアンケートの結果は公表されているのか。
- 事務局 アンケート結果はホームページに公表している。

- 事務局 自転車の保険については、火災保険、自動車の任意保険等他の保険に入っている人を加えるとかかなりの数になるのではないかと考えられる。
- TSマークだけではない、全ての自転車保険の保険加入率を目標とすることにより、保険加入者が増加し、自転車事故の被害者の救済につながると考えている。また、TSマークについては業界で加入者数を公表されているので、その数字を参考に加入を促進していく。
- A 数値目標に対してどのような基準で数字になっているのかを資料編にセットでだしてもらえると分かりやすいのではないかな。
- D 自転車安全利用推進日には、いろいろな活動をしているのか。
- 事務局 各行政と警察署が連携して実施されている。
- E 保険加入率をあげる具体的な施策はないか。TSマークは1年しか有効でない。ヘルメットも促進といってもダメではないか。プレミアムをつけないと普及しないのではないかな。
- 事務局 どのような形でPRをすれば保険に入ってくれるのか、いろいろな取組を検討中である。
- F 安全教育の効果測定をしていくとよいのではないかな。
- G 5年間の計画を単年度で検証して公表していくと良いのではないかな。単年度で変わってくるところが多いので警察と相談して計画的に施策を行っていくと良いのではないかな。
- F 数値的には大変分かりやすい。
- H 街頭活動をしていると、自転車のルールを知らない人が多い。自転車は車両であることを知らない人も非常に多いと感じられる。
- 保険のことも知らない人が多い。府民のみなさんに知ってもらう機会をもっと作ってあげればいい。
- I 65歳以上に対するヘルメットが大切。大阪でヘルメットを無償で配布していたので助かった事例がある。ヘルメットを無償で配布できればいい。
- 府警 大阪では帽子型のヘルメットを配布していた。今後、ヘルメット着用に向けて、いかにして広報啓発活動をしていくかが課題。

A 「シートベルトを着用していたら何人助かったか」のように、ヘルメットについてもデータがあればいいのではないか。

【自転車安全利用促進計画の府民への周知について】

D メディアや交通安全のボランティア等を通じて広めて行きたい。広報啓発活動が有る場合はできるだけ、ホームページ等で公表して欲しい。

【自転車安全利用促進計画検討委員会最終回が終了した個々の感想】

J ヘルメットのことは議論が多かったように感じた。自分の身は自分で守ることを広めていくことが大切。

B P T Aと初めて自転車安全利用推進員になった高校生と朝の登校指導を行った。仲間がボランティア活動をしているのを見た生徒達の空気が変わった。京都府立高等学校P T A連合会の立場から、高校生が自転車安全利用推進員になることで、高校生の事故がなくなっていくことを確信している。高P連や府立高校に伝えていきたい。

E ヘルメットは安く購入できるのではないか。ボランティア活動をすることによって入試や単位に影響するようにすればよいのではないか。

H 交通教室や街頭活動を一生懸命行っているが、少しでも自転車事故が減少すればいいと思う。死亡事故が0になるように現場でもっと努力したい。

C 事業所の立場として参画したが、従業員の事故防止はもちろん、地域の中でどんなことができるか、退職者を含めた高齢者事故防止ができないか、留学生への指導教育をやっていかなければならないことに気づいた。今後は指導員の育成について考えていかなければならないと考えている。

A 大学生の自転車マナーが課題。大学の授業を通して、身近なところから事故防止、安全の啓発を進めていけばいいかと思う。

F 自分の足のように使用している自転車を通じ、自分の身を守るという意識を高めていくことが求められている。自転車は安全に生活をするためのことを学ぶ良い道具で、うまく活用すれば啓蒙できるのではないか。

- G 自転車事故、高齢者事故、歩行者事故の減少が交通事故減少のポイントではないか。「自転車は便利で手軽」の中には、「いい加減」な気持ちで乗れるという意識がある。いい加減な気持ちがあるから事故がなくなるのではないか。計画の方向性が示されたので、今後は地道で着実な広報、啓発活動を行っていくことが大切ではないか。
- D 家にある自転車にヘルメットを被って乗ってみようと思う。
- K 広報活動や教育も相手に対する言い方一つで変わるので、自転車安全利用推進員として、指導員になれるよう勉強していきたい。
子どもに係わる仕事を通じて、親教育の大切さを感じている。
- I 良い経験ができた。現在している、子どもと関わる仕事を通じて自転車の指導をしていきたい。